

繊維ごみをごみにしない

家庭から出る衣料繊維ごみの再活用の提案

A2201510 加藤 優

研究の背景

現代は大量生産、大量消費の時代であり、特にファッションにおいては、ファストファッションが私たち大学生の年代においても人気である。しかし、ファストファッションが流行することによって、服の消費サイクルが早くなり、流行に合わなくなって捨てられる服なども増えている。日本の衣料の廃棄量は年間 100 万トンにのぼり、これを衣服の枚数に換算すると、衣服一着約 300gとして約 33 億着となる。また、リサイクル率は約 11%、リユース率は約 13%、残り約 73%は焼却されているという事実がある。このことから私は、主に衣料品において、繊維ごみの減少を目指すべく、不要な繊維ごみの現状調査から、どうすれば繊維ごみ減少につながるか研究する。

研究の目的

今多く分類されているごみの中でも、繊維ごみは再利用、リサイクル率が低いものとなっている。繊維ごみをごみとせず、再利用、リサイクル率を高めるために、その方策として、リユース方法やリユースしきれなかった衣料の再利用方法などについて研究・提案し、衣料繊維ごみを減量させることを目的とする。

研究のプロセス

実態・現状調査

↓

不要衣料の回収・回収した衣料の分析など アイデア・デザイン展開

↓

不要衣料譲渡会の開催、アンケート作成・実施・回収・分析など

↓

製作

調査の結果、現代の衣料は、石油原料の繊維素材を含む化学繊維を利用したものも多いため、製造エネルギーが大変多くかかる製品であり、簡単に廃棄すべき製品ではないということを改めて再確認した。現在、世界的に見ても繊維製品のリユース・リデュース・リサイクルの 3R は課題とされていることが多く、日本でも平成 23 年 6 月に経済産業省 製造産業局繊維課にて、繊維製品 3R システム検討会報告書が発行されている。

衣料のリユースには、譲渡/リサイクルショップへの売却/フリーマーケットやフリーマーケットアプリ、ネットオークションへの出品/自分で作り変えて再利用する等様々な方式が考えられるが、私はその中でも譲渡や自分で作り変えて再利用する、という部分に主に目を向けた。

結果

・不要衣料の回収 及び 不要衣料譲渡会

周囲の知り合いの方々に声をかけさせていただき不要衣料を回収した。また、その回収した衣料を、不要衣料譲渡会と称し、アンケートに答えていただければ無料で衣料を譲渡する会を、2016 年 12 月 22 日及び 26 日に

開催した。学内 G メールにおいて学生教職員の方々全員に一度事前に告知し、Twitter においては事前の告知と、開催当日のリアルタイムの告知で、できるだけ多くの人たちに参加していただけるよう心がけた。場所は学内の研修室をお借りし、プロダクトゼミ 2 年生の皆に手伝っていただいた。

総回収衣料数: 149 着 総衣料回収者数: 8 名(うち女性 6 名、男性 2 名)

12 月 22 日来場・アンケート回答者数: 7 名(うち女性 6 名、男性 1 名)

12 月 26 日来場・アンケート回答者数: 10 名(うち女性 9 名、男性 1 名)

総来場・アンケート回答者数: 17 名 男女比 15:2

総譲渡着数: 28 着/149 着 総譲渡者数: 11 名(うち女性 11 名)

レディース・メンズ・サイズを問わず、Y シャツや T シャツ、カットソー、パンツ、ニットなどが集まった。季節柄もあり、ニット製品や長袖のもの、羽織ものを持っていく人が多かった。

不要衣料譲渡会の様子



・譲渡後残った衣料での製作

不要衣料譲渡会を行った際にとったアンケートを参考にすると、リユース・リサイクルそのものに抵抗を感じることはないが、リユース・リサイクル衣料を利用することはない、という回答が複数見られた。リユース・リサイクル衣料に抵抗を持つ人の回答として、誰が着ていたものかわからない、前の所有者が気になる、などがあがっていた。これは直に着用する衣料だからこそ起こる問題であると考え、直接着用する衣料としてではなく、生活に身近な小物類を製作して使ってもらえるようにできないか考え、バッグや巾着などの小物類を中心に製作した。



考察

スケジュールにおいて、自己管理がうまくいかず、当初思い描いていたものとは程遠い進行状況になってしまったことが一番の反省点である。

今後不要衣料譲渡会を行う際には、周知方法を再考案すること、譲渡率を上げることが課題になると考える。